

# 知的障害特別支援学校高等部における 軽度知的障害のある生徒に対する教育課程の現状と課題 1

○井上昌士 猪子秀太郎 工藤傑史 菊地一文 大崎博史 涌井恵 小澤至賢  
(国立特別支援教育総合研究所)

KEY WORDS: 知的障害特別支援学校高等部 軽度知的障害 教育課程

## 1. 目的

近年の特別支援学校における障害のある児童生徒の増加の傾向は著しく、特に高等部においてはその傾向が顕著で、その中でも知的障害の程度が軽度（以下、軽度知的障害と記す）の生徒が増え、高等部全体の中で占めるその割合も多くなってきている。そのような現状の中で、卒業後を見据え、社会的及び職業的自立の促進を踏まえた軽度知的障害の生徒の教育的対応の検討が、各学校においては大きな課題となっている。本研究では、国立特別支援教育総合研究所が平成 22 年度から取り組んでいる「知的障害特別支援学校高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究」で行った実態調査の結果を踏まえて、その現状と課題について考察する。

## 2. 研究方法

全国特別支援学校知的障害教育校長会（以下、全知長）加盟の高等部のある本校，分校，分教室，校舎 590 校について、国立特別支援教育総合研究所によるインターネット調査（以下、NISE 調査）のデータ（回収率 75.1%）、全知長研究大会における情報交換資料の学校別データ（回収率 96.5%）、等を用いて、軽度知的障害の生徒の実態、学校タイプ別の教育課程の現状、教育課程編成及び実施上の課題と工夫、生徒指導上の課題等を明らかにした。

## 3. 知的障害特別支援学校の在籍する軽度知的障害のある生徒の実態

平成 22 年度の全知長研究大会における情報交換資料の学校別データによると、高等部の在籍人数が突出して多く、生徒総数は 42,780 人、うち軽度知的障害のある生徒は 14,385 人であった。高等部における療育手帳の障害の程度が軽度の生徒は 33,6% に及び、小学部の 11,9%、中学部の 7% に比べると、障害の程度による学部構成が異なることが明らかになった（図1）。軽度知的障害のある生徒の入学前所属機関に関しては、特別支援学級が 11,270 人と 74% を占めた。

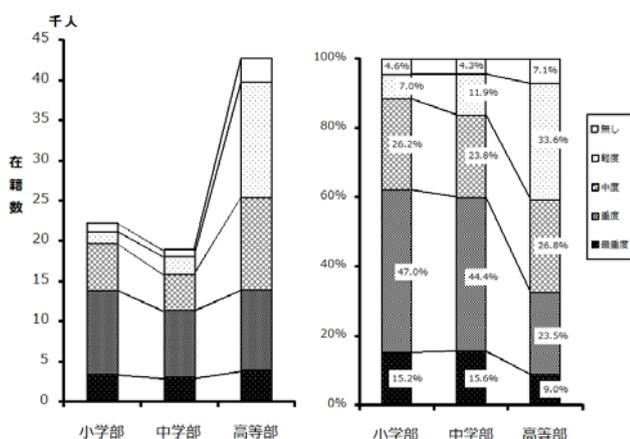


図1: H22年度 学部別手帳種別の在籍数と在籍割合

## 4. 学校タイプ別の教育課程の現状

高等部のある知的障害特別支援学校を、

- ①小学部，中学部，高等部のある本校，分校（中学部，高等部だけの学校 2 校を含む），
- ②高等部だけの分校，分教室，校舎，

## ③高等特別支援学校

の 3 つのタイプに分け、NISE 調査ではその教育課程について現状を整理した。タイプ①の学校では、各教科等の年間平均時数の約半数を領域・教科を合わせた指導が占めていた。タイプ②の学校では、各学科に共通の教科が 5 割強を占め、タイプ③の学校では、領域・教科を合わせた指導や各学科に共通の教科より専門教科の割合が多かった（図2）。主に進路学習を行う各教科等ではタイプ

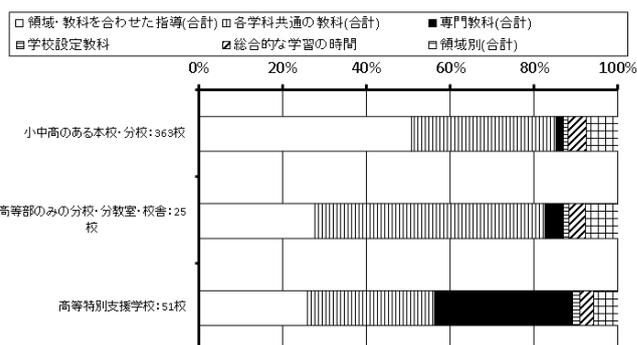


図2: 学校タイプ別の各教科等の年間平均時数割合

①では作業学習が 6 割近くで最も多かったが、タイプ②では 6 割、タイプ③では 5 割以上と、作業学習より教科「職業」で学習しているケースが多いことがわかった。

## 5. 軽度知的障害の生徒の生徒指導上の課題と特に必要な指導内容

軽度知的障害のある生徒が在籍する学校では生徒指導に関しても今までの高等部では見られなかった難しさがある。NISE 調査では、生徒指導上の課題としては、不登校、不健全な異性との交遊、精神症状等が多く挙げられていた。また、特に必要な指導内容としては、対人コミュニケーション能力や社会生活のルールなどの内容、職業能力の育成など働くことに関する内容、基本的な生活習慣など生活に関する内容が多く挙げられ、その傾向は学校タイプ別においてもほぼ同じであった。

## 6. 考察

NISE 調査からは、「職業」や「作業学習」といった枠組みで進路学習といった就労に結びつく内容を学習していること、軽度の生徒が多く在籍していることが予想されるタイプ②、③の学校ほど教科別の指導の比率が高まることが明らかになった。また、すべての学校に共通して生徒指導上の課題を抱えており、職業能力に関する教育だけでなくコミュニケーションや社会のルールのような自立活動や道徳に関連する内容、基本的生活習慣といった日常生活の指導に関連する内容について指導の必要性を感じていることも明らかになった。

## 《文献》

国立特別支援教育総合研究所(2009). 知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究. 研究成果報告書

(INOUE Masashi, INOKO Hidetaro, KUDO Takeshi, KIKUCHI Kazufumi, OSAKI Hirofumi, WAKUI Megumi, OZAWA Michimasa)